

2007年3月9日参考資料 (by 中島 満)

平成18年度第4回

東京湾アマモ場・浅海域再生勉強会にあたって

「東京湾漁場図」制作者・泉水宗助を探せメモ

はじめに

[季刊里海] 第2号(もっか急ぎ編集中です)掲載の第1特集「現古東京湾を探検する」(仮題)では、今回の勉強会で使用される「東京湾漁場図」(明治41年農商務省監修、制作者:泉水宗助)の現代的価値について、民俗学研究者の尾上一明さん(元浦安市郷土博物館主任学芸員)と動物考古学研究者の西野雅人さん(元市原市文化財センター)及び編集主幹中島満により検討した論文・ノートを掲載するつもりです。東京湾漁場図が制作されるにあたっては、もともと明治10年代後半から農商務省水産担当官(金田帰逸技師・熊木治平技手)らによって調査されてきた東京湾の生物・海洋・地質を詳細にまとめた「東京湾漁場調査報告」(農商務省)のデータ、および現在震災と戦災により消失したといわれる海図制作調査資料が元になっています。図は、報告の付録として添付されたもののほかに、泉水制作図、東京帝国大学名の付された図など数種類があることがわかっていますが、原図の内容については、(詳細に対照していないため確証はないが)同一版によるものと推察されます。

漁場図は、今回複写され掲示されており、漁場、干潟や砂洲などの沿海域の性質

ごとに、沖に向かって、いわゆる根・瀬・藻場の位置、名称を詳細に、古来から伝承されてきた地域名称によって記されており、現在広大な埋め立て開発用地造成により消失しているもののおおいだけに、現代の姿と対照させ、いわゆる「再生」目標の目安にするためにもとても貴重なデータであろうと思います。この図については、民俗学者で初代水産庁水産資料館長でもあった桜田勝徳による「東京湾の海藻をめぐって」(渋沢敬三先生還暦記念出版「日本水産史」1957年所収)と題する詳細な解説・研究があります。今回、前記尾上さんにより、「桜田解説を解説する」果敢な読解作業によって、桜田が歩いた東京湾の民俗誌および漁業誌を、現代の読者にわかりやすい情報知見として提供しています。

また、1000ページ近い「調査報告」については、データ量の多さや旧字体による読みにくさを、西野さんによって、現代語表記および現代語翻訳(リライト)作業をしていただき、貴重な東京湾全体の明治期における自然生態の状況を読み取ることができると思います。

それと、桜田もその経歴についてまったく知らなかった泉水宗助とはいかなる人物であったのかということが、中島の興味の対象にずっとありまして、ぼちぼちと文献をあさっ

て調べてきたものを「泉水宗助を探せー漁民にして自由民権家、この人物ははたして何者であったのか？」という「ルポ泉水伝」を中島がまとめています。

ということで、泉水宗助は、まだまだ文献が少なく、なぞが多い人物なのですが、どんな人間であったのか、昭和8年に千葉県君津郡木更津尋常小学校編・刊になる「第37号郷土読本」中の「高学年用」編「郷土の先駆者」の第1番目に取り上げられた「泉水宗助」紹介を全文引用しておきますので、ご覧ください。右上の写真は「木更津市史」に掲載（872ページ）されているものです。旧字体は新字体に、和数字は洋数字に置き換え、一部わかりやすくするために句読点の挿入、送り仮名をおくる等中島により最小限度の改変をしています。

「千葉県君津郡木更津尋常小学校 郷土読本」（1933年）より

10 郷土の先覚者

一、泉水宗助

桜井海苔養殖の元祖にして、本県内湾海苔養殖の先覚者たりし人に泉水宗助がある。氏は安政3年11月27日桜井に生まれた。

資性穎敏しせいえいびんにして、幼児より学問を好み、石田秀伝しゅうでん、斎藤惺せい、嶺田楓江みねだふうこう、栗本鋤雲じょうん等について学問を修め、かたわら武術を鍊って心身の修養を積まれた。明治5年学制の頒布せらるるや、選ばれて木更津学事係を命ぜられた。時に年わずか17歳であった。氏は常に人より一歩進んでいたもので、断髪令の発布される



泉水宗助

以前にはや断髪を
実行して人々に範
をしめしていたと
いうことである。

明治8年12月
望陀郡もうだごおり（もうだご
ほり）第4代区一
小副戸長に任ぜら
れ11年12月貝

淵村、桜井村の連合戸長となった。

明治12年11月恩師嶺田楓江先生の嶺田中学校が貝淵に創設された時、先生の業を助け、素読係りとなって、精励かく謹、生徒の信望を一身に集めた。

明治13年12月村人のためにと、桜井の海に海苔の養殖を創はじめたが多大の資財と労力とを費して試作して遂に失敗に終わった。しかし氏は不撓不屈、幾多の困難と漁民の迫害とに打ち克ち苦心の結果遂に成功の域に達した。22年選ばれて望陀都漁業組合頭取、東京湾漁業組合、千葉県副頭取の要職につかれた。

後、君津、市原、東葛の諸沿岸に養殖を試み、終に東京湾沿岸の海苔養殖の隆盛を見るに至った。氏の功績は誠に偉大である。氏の社会的活動は更に政治的方面に進出した。時あたかも板垣、江藤、後藤等の民選議員設立の建白によって始めて府県会を設立した直後であったので、安田徳次郎、松本四郎、板倉中等同志を率いて房総改進黨を組織し、憲政の発達、民権の振起を促し、明治17年選ばれて県会議員となって、県政の枢機に参画した。

氏は又交通の利便を企画し、明治15年清西村祥雲寺に寓せる方里小路伯爵までのこうじはくしゃくが隅田川

一銭蒸気、東京湾汽船のいずれか一つを設けようと計画していることを知り、東京湾汽船の有利なることを説いて、本県内湾はじめての汽船の航路を開いた。

その後学務委員、県水産視察員、郡統計補助委員等の職を奉じて公共のために力を尽した。又災民救恤のため浄財を寄付せることも多く、そのために家産を傾けたという。

かくて幾多の功績を遺し、人々に惜しまれつつ、昭和4年1月13日、74歳をもって他界した。

彼は人格高潔果断に富み、常に積極的にして堅忍不拔、よく難関を突破して郷土のため尽すいするところが多かった。

——引用了。

東京湾はひとつの「里海」

いかがですか、こういう人物が、まだ東京湾をめぐる歴史上の人物としてノーマーク、未調査であったことが不思議でなりません。とくに、彼がなぜ「図」を、個人の資産をつぎ込んで制作し、関係機関に配布したのか(何部作成したのかまったく不明ですが)についてもわからないのですが、おそらく、金田帰逸、熊木治平という有能な水産吏員がリーダーシップをとって行った東京湾漁場調査に自らも参加して、調査に協力するなかから「農商務省監修」による個人製作配布の意義を見出したのであろうと考えています。江戸時代

からの湾岸各地区の漁業代表があつまって「東京湾内協議による漁場秩序」が図られてきた伝統が、県や郡域をこえて湾内一斉、総合調査が実現できたのだと考えております。明治期の東京湾漁業組合の結成や、総代として名を連ねた泉水宗助の署名のはいった農商務省大臣宛文書が残っていますが、こうした東京湾全域の漁業調整機能は、現代でいえば、全域を「ひとつの里海」ととらえた東京湾を見直す視点とでも言えそうです。過開発によって大きく変貌を遂げた東京湾を現代の人々があらためて考え直していくときに必要な情報のひとつとして図や報告の重要性が位置づけられるのではないのでしょうか。

[季刊里海]第2号では、いくつかの新発見資料とともに、郷土読本や、明治期の人名録「房総人名辞書」の古い文献や「木更津市史」など数少ない現代資料に記載された伝記記事に一部修正注釈解説を加えながら、泉水宗助について記していこうと思います。東京湾におけるノリ養殖の先覚者としては、現富津市内に銅像がたっている「近江屋甚兵衛」(明治3～44年)が有名ですが、その名の陰に隠れて、かえりみられることのなかった東京湾ノリ養殖の功労者次席格にあたる泉水さんの破天荒な、いまでいえば漁業を基幹とするベンチャービジネスに果敢に取り組んだ人生に陽の目を当ててみようというのが、狙いなのです。

ぜひ、里海第2号読んでみてください。

中島 満 (なかじまみつる) : まな出版企画 : [季刊里海] 編集主幹
Tel : 03-3319-3127 WEB サイト「MANA しんぶん」 : <http://www.manabook.jp>
[季刊里海] 通信 : <http://satoumi.cocolog-nifty.com/blog/>